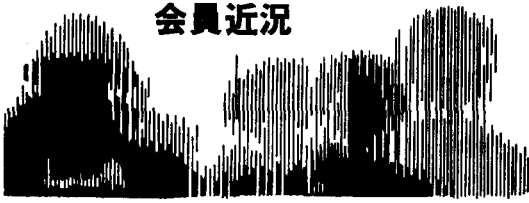


## 会員近況



日立製作所  
中央研究所情報特許部 大村 一郎

バーナードの名著「経営者の役割」の解明と検証を試みており、その解明には1920～1940年の Bell システムの分析が必要であり、また実証的研究の用具としてファジイ集合、マルコフ解析、カタストロフィー理論などを積極的に使用している。後者の数学的手法はバーナード理論を一般システム・モデルとする中心的課題となるもので、このモデル形成により、バーナード理論を一般組織のレベルで議論しうる体系としたいと考えている。

企業における投資が現在のなものから、将来の布石に対するものの比率が高くなるにつれて、不確実性が強調される時代となってきている。上記の数学的手法が不確実性の解析を1つの課題としているものであるから、実践的な手法として定着するための実証的研究が望まれるのである。現実の問題に直面して、日本人特有の柔軟性による適応力が不確実性の時代を経験、直感、常識で処理し得たとしても、環境適応の戦略的意思決定をより適正なものとするために、上記の手法が必要であろうと考える。バーナード理論は現実の事象と数学的概念を媒介する、きわめてよき指導者たりうると考えてよいのではなかろうか。

工業技術院機械技術研究所  
システム部 小鍛冶 繁

OR学会に入った頃は大気汚染問題の研究を始めた時期で、右も左もわからないまま自動車の排気特性から大気中での汚染物質の濃度測定まで、データとりにあけくれています。今は仕事も大分変わり、この夏は岩手県の三陸海岸で沖合のいかつり漁船の灯を遠くに見ながら、天体観測用気球に搭載する計算機システムの調整で脂汗を流していました。

私の興味の対象はネットワークの機能解析と合成問題で、仕事が見かけ上変わっても、交通ネットワークや電子回路網など、ネットワークに関連する問題に不自由す

ることはなさそうです。

筑波大学社会工学系 江藤 肇

大学という所は、戦後の民主化や技術革新の影響をあまり受けなかったので、近代化された社会との不調和が多く、ORのネタがゴロゴロしています。伝統から自由で予算も多い筑波大学が、ほんとうに新構想に作られたか否かは、企画の評価、インプリメンテーションのケーススタディとして、研究意欲を刺激します。筑波の目玉とされた、学際研究と、そのための研究組織（研究の学系と教育の学群の分離というマトリクス構造）が早くも崩れている事実は、新制大学が、一度は大学院を学部から切り離して横断組織にしながら、再び学部付属に戻した事実と並んで、日本の大学体質として興味をひきます。研究組織のマトリクス構造は、欧米では最も普及しており、その有効性に関し、経営科学誌上に実証論文も数篇出ております。日本では、大学の企業秘密に関する研究は抑えられています。税金による国営研究や大学もORの対象にするか否かは、その国の民度のパラメーターと考えられています。

武蔵工業大学 学長 石川 馨

1976年に東大を定年退官し、東京理科大にゆきましたが、1978年に現職につきました。私の理想は、大学にいらなくてもよい、しかもいらなくてはならない学長になろうと思っています。

最近日本の経営管理、CWQC (TQC)、QCサークル活動が世界的に有名になりすぎたために、あちこち引っぱりまわされています。

OR学会も、日本のORの実施方法を確立して、80年代をどうやって乗り切ってゆくか検討してください。

(株)ユサ・コンピュータ 藤原 信一

フォートランを用いて数値計算のようなことをやっています。現在の仕事はとくにORとは関係ありませんが、仕事をしていくうえでOR的発想を取り入れて効率よく行なっていく必要性を感じております。アプリケーションソフトを作る場合には計算機の専門家であるよりも、

適用業務の専門家でなくてはならないが「言うは易く行なうは難し」という心境です。私は個人的にはシミュレーションに興味をもっており勉強に励んでいますが、何分にも業務外にやっておりますので遅々として進みます。現在は社会現象のシミュレーションは本質的に並列

処理であるという観点に立って簡単な並列処理用言語を考えております。

私の場合にはORの現場からの刺激が欠けていますので、学会誌はORを実際に適用する感覚を迫体験するという気持ちで読んでいます。

### 会合記録

庶務幹事会	10月8日(月)(7)
タスクフォース	10月22日(月)(4)
編集委員会	10月12日(金)(13)
ORサロン	10月27日(土)(11)
研究普及委員会	11月8日(木)(10)
編集委員会	11月9日(金)(9)
庶務幹事会	11月12日(月)(4)
IAOR委員会	11月15日(木)(2)
理事会	11月22日(木)(18)

#### 第4回理事会議題

1. 第3回理事会議事録の承認
2. 入退会の承認
3. 昭和54年度秋季研究発表会・シンポジウムの報告
4. 昭和55年度春季研究発表会の準備

#### 備状況

5. 今後の編集計画について
6. 国際関係報告
7. 会長候補者選考委員ならびに役員選出手順について
8. 昭和54年度上半期収支決算報告
9. 昭和55年度事業計画書ならびに予算案の作成について
10. その他

### 入退会

#### ●入会 (正会員)

- 小野 耕司 鉄道技術研究所  
 城 信雄 日本総合技術研究所  
 津田 厚 吉富製薬㈱  
 西谷 正弘  
 深道 春男 大分大学

山西 卓郎 花王石鹼㈱  
 山根 勝己 中国電機製造㈱  
 C. O. Fong University of  
 Malaya  
 (学生会員)

石田 亘 神戸大学大学院  
 宮崎 均 日本大学大学院  
 (賛助会員)

住友電気工業㈱

#### ●退会 (正会員)

- 岡崎 卓 中村健二郎 三浦良造  
 (移動)  
 学→正  
 菊田 健作 富山大学  
 高橋 健二 高橋土地家屋調査事務所  
 平松 寿昭 陸上自衛隊

**編集後記** ▶あけましておめでとうございます。今年もどうかよろしくご愛読のほどお願いいたします。▶80年代の幕開けに際し、ORの今後をどう占うか小林会長に書いていただきました。今後ますますORへの期待が大きくなるというのは買いかぶりでしょうか。▶新シリーズとなって5年目。学会としてのOR普及活動の最も大きな柱となっていることを思うと非常に大きな責任を感じます。▶厳しい経済情勢のなかですが、気分一新のつもりで新年号から表紙を変えることにしました。評判のよかったこれまでのデザインを基本的に踏襲し、高品質紙からよりポピュラーなアート紙へ、またグレーからクリ

ームへと紙質と刷色での変化。ちょっと派手になったでしょうか。本誌が書架や店頭で少しでも目をひくようにとも念じています。▶事例研究について本号からひと口コメントをつけることになりました。事例研究を毎号かかさず掲載しようというのが現編集委員会の方針です。論文誌のような厳密なレフェリー制度はとっていませんが、原稿は一応編集委員会で目を通し、一部訂正・修正をお願いすることもあります。事例研究としての読みどころ、活用法など簡単なコメントをつけることが、この事例研究のページを盛りあがらせるものと考えています。事例研究の投稿・推薦を歓迎します。(M)

## オペレーションズ・リサーチ

昭和55年1月号 第25巻 (新シリーズ第5巻) 1号 通巻229号  
 代表者 小林 宏 治  
 発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会  
 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル  
 (電話 03-815-3351~2) ☎ 113  
 編集人 高橋 磐 郎  
 発売所 株式会社 日科技連出版社  
 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 ☎ 151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 650円 (郵送料含) 年間予約購読料 7200円 (郵送料含)

本誌への広告お申し込みは日経弘報社 (563-2241)、明報社 (571-2548) へ